

宮林穎夫先生を偲ぶ

故宮林穎夫先生には音響学会北陸支部の設立準備委員や、金沢大学で開催された音響学会秋季研究発表会の実行委員のメンバーとして、またその後の支部役員として多大なご活躍をいただきました。ここに、あらためて深く感謝する次第です。

宮林さんが初めて私の研究室を訪ねられたのは平成9年の春でした。金沢大学自然科学研究科数理情報科学専攻博士後期課程の社会人入学で、音声情報処理に関する研究を希望されたのが出会いのきっかけでした。平成24年7月4日の暑い日に宮林さんの趣味でもあった畑作業中に急逝されました。60半ばでのあまりにも早い旅立ちです。私が宮林さんへの追悼の辞をしたためるなど夢にも想っていなかったことです。

当時の富山商船高等専門学校の教官という激務のなか、こちらの研究室での毎週のゼミに参加され、また入学初期の頃は何科目かの講義を受講する義務もあり、富山県の新湊から小立野のキャンパスまで週1、2回定期的に通っておられました。課程の後半では研究成果の報告とディスカッションで土曜日の午後に定期的に来室されておりました。他の曜日は本来の仕事で時間がとれなかったようです。そのような多忙な状況の中で「音声ピッチ抽出」に関する研究を精力的に進め、論文題名「帯域フィルタ対バンクとリカレントニューラルネットワークを用いた音声ピッチ抽出法に関する研究」で学位論文（甲）を取得されました。

研究活動はもちろんのことですが、他に研究室での各種コンパや小旅行にも参加されました。私とあまり年齢差もなく、他人から見ればどちらが学生なのか判別できなかったのではなかったかと思ったりしていました。しかし外見だけでなく、研究面でもとくにリカレントニューラルネットワークを用いた研究手法に関し、推測されるあらゆる場合を想定し、パラメータを緻密に設定して得られた実験データを前に、多方面から議論したことが思い出されます。さらに、教育機関で勤められていた宮林さんの職場での経験談を通し、私もいろいろと勉強させてもらうことがしばしばでした。その一つに、研究室の卒業コンパをとある居酒屋で行っていたとき、隣室に他の研究室学生の卒業コンパも並行して行われていました。そこが非常に荒れ気味でこちらでの話ができないくらいの大声でのザワメキだったので腹立たしく感じていたとき、宮林さんがひとこと、「あの研究室の指導教官はよっぽど厳しかったようだな」と。そう聞いてなるほどそういうことがよみとれるのかと、こちらの腹立たしさも消えたことを思い出します。

宮林さんが博士課程を修了して後、平成21年に富山商船高等専門学校は富山工業高等専門学校と統合し、新しく富山高等専門学校として発足しましたが、その過程で商船高専の教務主事や副校長を勤められ、さぞ多忙を究めていたことかと思えます。平成22年3月に退職された後も再雇用の立ち場で学生の研究指導を精力的に継続されていました。平成24年3月にすべての職を離れ、これからが自身の思うままの生活を始められた矢先のことでした。

大学卒業後は故郷を離れ、民間企業に籍をおいた時代もあったようですが、その後故郷に戻り教育・研究職につかれてから退職まで、その間地元の社会活動にも奉仕されるなど、文字通り息つくひまもない生涯だったと想像されます。それだけに、急逝されたことが残念でなりません。

ここに、宮林穎夫先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。